「一切を前もって」

（マルコ13:14-23）

挽地茂男

2019.5.26 日本基督教団千歳丘教会

今わたしたちはマルコによる福音書１３章の主イエスが語る「黙示的説教」（「終末的説教」）を読んでいます。１３章が告げる世の終わりは、１４章以降の主イエスの生涯の終わりと重なって、受難物語の背景を形作っています。そして世の終わり、つまり終末論を学ぶときには、そこに人の一生（わたしたちの人生）の終わりを意識的に重ねて考えて見るべきだと思います。それとの関連で、夏にお迎えする樋野興夫先生の働きに触れてきました。先生の本や映画に紹介されている方々の生き方は、がんの宣告によって、自分の人生の終わりを強く意識すると共に、今を精一杯に生きる生き方へと向かって行きます。先生の書かれ『末期がん、その不安と怖れがなくなる日』という本の帯にはこう書かれています。「死と直面したとき、人はもう一度、生き始める。」ふつう人は、自分の死、つまり自分の人生の終りをあまり意識せずに生きています。しかし一度（ひとたび）終り有る人生を意識するとき、人にはもう一度新たに生き始める機会が訪れるのです。

樋野先生は、がんの患者さんや患者さんの家族がよりよく生きるために「がん哲学」を提唱しておられます。「がん」と「哲学」がどのように繋がるのか、不思議な言葉の組み合わせですが、現実の成果としては、日本全国約１５０箇所に「がん哲学カフェ」「がんメディカル・カフェ」とよばれる、がんの患者さん、患者さんの家族、医療関係者、まったくがんとは無縁の方も含めて、がんと共に生きることを語り合う交わりができています。映画はその交わりをドキュメンタリーで報告したものです。その場面展開の要所要所に、樋野先生の語った、がん患者さんたちや家族を慰め励ました言葉が、織り込まれます。

映画の中で樋野先生は「『がん

哲学って何ですか』ってよく訊かれるけど、言っている本人もよく分からない。分からないからやっている、というところもある。みなさんがこのような交わりを続けながら、『がん哲学』とはなにかを私に教えてくれるようになればよいと思っている」と言っておられます。〔先生は他の所では「がん哲学」とはこういうものだと説明しておられるので、先生のこの発言の意味は「がん哲学」には、これからまだまだ拓かれ展開していく未知の部分があるのだ、ということだと思います。〕また樋野先生は、「がんは人に生きることを考えさせる病気だ」と言います。自分の人生を見つめて考えさせること、そして共に考えることが「哲学する」という営みだ、ということだと思います。

哲学という言葉はもともとギリシア語ではフィロソフィア、フィレオー（愛する）という動詞とソフィア（知恵とか知）という名詞の合成語です。ですから哲学とは「知恵や知を愛すること」「愛知」という意味です。何か難しい哲学理論を知っているとか、理解しているとか、という意味ではないのです。人生をよりよく生きるために知恵を愛する人、知恵深く生きることを求める人は誰でも「哲学者」なのです。思いますに、愛知県の愛知という県名はなかなか素晴らしい県名ですね。

さて、本日の聖書の箇所は、破壊の日が到来することを語ります。１４節。

13:14「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら――読者は悟れ――そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。

「憎むべき破壊者（τὸ βδέλυγμα τῆς ἐρημώσεως）」という表現は旧約聖書のダニエル書〔時代設定は古代ペル

① ｖ．１４－２０　黙示的資料	② ｖ．２１－２３　編集（伝承使用）
(1) 憎むべき破壊者	(1) 偽メシア、偽預言者の出現
(2) 苦難の到来	(2) しるしや不思議な業
(3) 選民に対する神の保護	(3) イエス・キリストの警告

シャに設定されているが、紀元前２世紀のマカバイ戦争が現実の歴史的文脈です。〕および旧約聖書続編の第１マカバイ記に出てくる表現です（ダニ9:27，11:31，12:11；Ｉマカ1:54）。つまり紀元前１６７年から始まるマカバイ戦争の文脈で出てくる言葉なのです。当時イスラエルを支配していたシリア（セレウコス朝シリア）の皇帝アンティオコス４世は、ユダヤ民族に対してユダヤ的宗教や生活習慣を捨てて、ヘレニズム的（ギリシア的）な習慣に従って生活するように勅令を下します。ダニエル書１１章３１節。彼（アンティオコス４世）は軍隊を派遣して、砦すなわち聖所（エルサレム神殿）を汚し、日ごとの供え物を廃止し、憎むべき破壊者〔新共同訳「憎むべき荒廃をもたらす者」τὸ βδέλυγμα τῆς ἐρημώσεως を立てる。

アンティオコス４世のこの政策によって、エルサレム神殿は「憎むべき破壊者」を拝む神殿にされてしまうのです。もう1箇所。第１マカバイ記の１章５４－５９節。1:54 第百四十五年、キスレウの月の十五日には、王（アンティオコス４世）は祭壇の上に「憎むべき破壊者」を立てた。人々は周囲のユダの町々に異教の祭壇を築き、1:55 家々の戸口や大路で香をたき、1:56 律法の巻物を見つけてはこれを引き裂いて火にくべた。1:57 契約の書を隠していることが発覚した者、律法に適った生活をしている者は、王の裁きにより処刑された。1:58 悪人たちは毎月、町々でイスラエル人を見つけては彼らに暴行を加えた。 1:59 そして月の二十五日には主の祭壇上にしつらえた異教の祭壇でいけにえを献げた。

「憎むべき破壊者」とは――想像がついているかもしれませんが――ギリシアの神ゼウスの像をさしているのです。エルサレム神殿はゼウスの神殿にされてしまうのです。

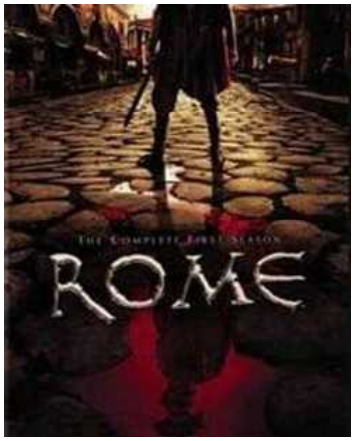
では新約聖書に出てくる「憎むべき破壊者」もゼウス像のことなのでしょうか。もちろん違います。この時代に「立ってはならない所に立つ」「憎むべき破壊者」とは、誰を、あるいは何を、指して言われているのでしょうか。いくつかの意見がありますが、ふつう歴史的文脈はユダヤ戦争

を想定します。そして、この「憎むべき破壊者」はローマ軍をさしていると考えられています。具体的には、ユダヤ戦争時のローマ軍司令官ウェシパシアヌスあるいはそれを引き継いだ息子のティトス将軍ないしローマ兵一般が考えられます。いずれにせよ軍事的騒乱を背景に神に選ばれた者以外は「立ってはならない」聖所を蹂躙する者たちのことです。「読者は悟れ」という奇妙な読者への直接的な呼びかけが挿入されて、起るべき事態への切迫感や緊急性が増大しています。

マルコは続けて、その日が壮絶な破壊の日、未曾有の苦難の日であると語ります。１５－２０節。

13:15 屋上にいる者は下に降りてはならない。家にある物を何か取り出そうとして中に入ってはならない。13:16 畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。13:17 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。13:18 このことが冬に起こらないように、祈りなさい。13:19 それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来るからである。13:20 主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。

ユダヤ戦争は西暦の６６年に始まり、西暦７０年のエルサレム陥落にまで至ります。その発端は、当時のユダヤ総督であったフロルスがエルサレムのインフラを整備するための資金として神殿の宝物を持ち出したことに始まります。このためにカエサリアで暴動が起き、カイサリアのユダヤ人が殺害されます。これに続いてエルサレムで過激派による暴動が起こります。ユダヤ側の指導者は、シモン・バル・ギオラ（Simon Bar-Giora）、ギスカラのヨハネ（John of Gischala）、エレアザル・ベン・シモン（Eleazar ben Simon）。フロルスはシリア属州の総督に援軍を要請します。シリア総督が軍団を率いて鎮圧に向かいますが。反乱軍の前に敗走してしまいま



す。そのためローマ皇帝ネロは将軍ウェスパシアヌスと三個軍団を派兵します。ウェスパシアヌスは息子のティトスと共に周辺都市を各個撃破し、エルサレムの孤立化に成功します。しかし６８年４月ローマで政変が起こり、６月に皇帝ネロが自殺します。ウェスパシアヌスはローマにとって返し、ユダヤ戦争は一旦、戦線膠着状態に入ります。６９年１２月にローマ皇帝として覇権を掌握したウェスパシアヌスは、息子ティトゥスをエルサレム攻略に向かわせます。そして７０年、エルサレム神殿はユダヤ暦第６月８日、９日、１０日と火を放たれて炎上し、そしてエルサレムは陥落します。

ローマ軍のエルサレム攻略経路

避難勧告がなされます。１４節。「そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい」（v.14）。戦乱はユダヤ地方全体に及ぶことが予想されています。「屋上にいる者は下に降りてはならない。家にある物を何か取り出そうとして中に入ってはならない。13:16 畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。」「屋上にいる者」「畑にいる者」という表現は、いつもと同じように「屋上で」仕事をしているとき、「畑で」仕事をしているときに――苦難のと到来を予想だにすることもないときに、逆をつくように――不意に事態が急変する可能性を示しています。事態は緊迫の度合いを増しているのです。緊急の事態に備える心づもりを指示します。また、時期についても最悪の時期に起こらないように祈るようにと指示されています。１７－１８節。「13:17 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。13:18 このことが冬に起こらないように、祈りなさい。」妊娠中であっても、乳飲み子を抱えている場合でも、母親には避難が困難になります。冬もまたしかりです。ユダヤの人々が経験する苦難の規

模は、過去にも未来にもないほどの未曾有のものになると言われています。「神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来る」(v.19)。その苦難が余りにも苛烈なので、「主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない」と言われています(v.19. Cf.第１エノク書80:2、第２バルク書20:1-2, 83:1,6)。

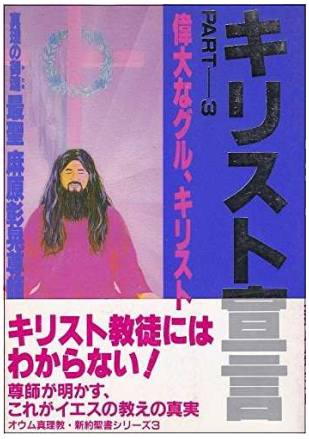
JUDEA CAPTA（ユダヤ戦争、戦勝記念硬貨）左はウェシパシアヌス

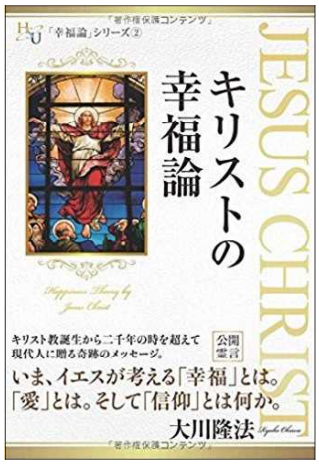
そんな苦難の時に、現れる偽キリストや偽預言者は、信徒の群にとって、大きな危険となることは必定です。２１－２３節。

13:21 そのとき、『見よ、ここにメシア(キリスト)がいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。13:22 偽メシア(キリスト)や偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。13:23 だから、あなたがたは気をつけていなさい。一切の事を前もって言っておく。」

未曾有の苦難に喘ぐキリスト者の前に偽キリスト(メシア)、偽預言者が出現します。真理と偽り、正と邪を混乱させ、まどわすものが出現するのです。しかもその偽キリスト(メシア)、偽預言者は「しるしや不思議な業」(σημεῖα καὶ τέρατα)を行うと言われています。しるしや不思議な業は受難の民の信仰を惑わすのです。真偽と正邪を見分けることができるでしょうか。十字架のキリストとは対照的な宗教的パーフォーマンスがキリスト者を惑わします。

空中浮遊を売り物にしていたオウム真理教の教祖・麻原彰晃に『キリスト宣言』(1992)という本があります。１９９２年、彼は自分こそがキリストであると宣言しました。渋谷の駅前で、街宣車の上から集まった聴衆に向かって、彼がキリストを宣言する姿を、わたしは見ました。また、幸福の科学の教祖・大川隆法は以前から様々な神々





や歴史上の偉人たちとチャネリング（交信）ができることを売り物にしている人ですが、最近キリストと交信した内容が『キリストに聞く「同性婚問題」性と愛を巡って』という書名で２０１３年に、『キリストの幸福論』という書名で２０１４年に刊行されています。偽キリストや偽預言者の問題は古代だけの問題ではないのです。

偽キリストや偽預言者の特徴は何でしょうか。その最大の特徴は、十字架に神を見ることができないことです。十字架によって成し遂げられた救い、十字架の示す真理は、表面的にアピールする力ではなく人間の本質に迫る力だからです。マルコ１５章３９節のローマ兵、百人隊長が見たものは、処刑されて悶絶して果てた一人の男でした。

15:39 百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

「十字架におけるイエスの死は、すべてのキリスト教神学の中心である」と、今日の指導的神学者のひとりであるユルゲン・モルトマンは語っています。

ユルゲン・モルトマン

ここにこそ神が見える（見るべきだ）というのです。「これが神であり、神はこのような方なのである。神が最も偉大なのはこの［イエスの］へりくだりにおいてであり、神が最も栄光に満ちているのは［イエスの］この自己放棄における以外にはない。神が最も強いのは［イエスの］この無力さにおいてであり、神が最も神的なのは［イエスの］この人間性においてである」（J. Moltmann, Der gekreuzige Gott, 1972, S.190. 邦訳『十字架につけられた神』277-79, 修正加筆・挽地）。

パウロは言いました。Ｉコリント１章１８－２５節。

1:18 十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。1:19 それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、／賢い者の賢さを意味のないものにする。」1:20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。1:21 世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。1:22 ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、1:23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、1:24 ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。1:25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

終末的混乱の中で信頼すべきものは、キリストの言葉です。主イエスは言われます。「一切の事を前もって言っておく」（v.23）。かつて主イエスによって語られ、今も聖霊を通して語られる「み言葉」が頼りです。信仰を惑わし、また信仰者を迫害する者は必ず現れます。わたしたちはそのとき主が語られたことの信実を知るのです。

黒澤明監督の作品に「生きる」という映画があります。人生の終末に目覚めた男〔市役所の市民課長〕の生き方を描いた作品です。主人公は市役所で市民課長を務める渡辺勘治。彼は、かつて持っていた仕事への熱情を忘れ去り、毎日書類の山を相手に黙々と判子を押すだけの無気力な

日々を送っていました。ある日、その渡辺は体調不良のため休暇を取り、医師の診察を受けます。医師から軽い胃潰瘍だと告げられた渡辺は、実際には胃癌にかかっていると悟り、余命いくばくもないことに衝撃を受けます。不意に訪れた死への不安などから、これまでの自分の人生の意味を見失った渡辺は、市役所を無断欠勤し、これまで貯めた金をおろして夜の街をさまよいます。そんな中、飲み屋で偶然知り合った小説家(伊藤雄之介)の案内でパチンコやダンスホール、ストリップショーなど、律儀に生きてきた役人人生を自嘲するかのように、一時的な放蕩に身を委ねます。しかし、一時の放蕩も虚しさだけが残り、事情を知らない家族にはだんだん白い目で見られるようになっていきます。

その(放蕩の日の)翌日、渡辺は市役所を辞めて玩具会社の工場作

業員に転職していようとしていた部下の小田切とよが、退職のために課長の判子が必要だというので訪問してきます。その後、何度か食事をともにし、一緒に時間を過ごすうちに渡辺は若い彼女の自由な生き方、その生命力に惹かれます。自分が胃癌であることを渡辺がとよに伝えると、とよは動揺しながらも、自分が工場で作っている玩具を見せて「こんなものでもつくっていると、日本中の子どもと仲良しになった気持ちになるわ。課長さんも何か作ってみたら」と言います。その言葉が渡辺に光を投げかけます。心を動かされた渡辺は「まだできることがある」と気づき、次の日市役所に復帰します。

それから5か月が経ち、渡辺は死にます。渡辺の通夜の席で、同僚たちが、役所に復帰したあとの渡辺の様子を語り始めます。渡辺は復帰後、頭の固い役所の幹部らを相手に粘り強く働きかけ、ヤクザ者からの脅迫にも屈せず、ついに住民の要望だった児童公園を完

成させ、雪の降る夜、完成した公園のブランコに揺られて息を引き取ったのでした。同僚たちは、役所というのは組織全体で動いているのであって、児童公園の建設は役人一人のスタンドプレーで到底できるようなものではなく、その功績は、役所という組織の上層部である助役や土木部長や公園課長などのものであると、渡辺の努力をそっちのけでごますり合戦を繰り広げます。そこに新公園の周辺に住む住民が焼香に訪れ、雨の日も風の日も公園の完成に向けて働き続けた渡辺の遺影に泣いて感謝をささげます。

いたたまれなくなった助役など幹部たちが退出すると、市役所の同僚たちは実は常日頃から感じていた「お役所仕事」への本音を吐き出します。「役所では理想を描いても何もできない。役所では何もしないこと以外は、すべて過激行為なんだから」などと語り、それに比べて渡辺さんはすごい、口々に渡辺の功績をたたえ始め、これまでの自分たちが行なってきたやり方の批判を始めます。そして渡辺さんのあの底力は、どこから出てきたのだろう、という話に進展していきます。

この映画には、「ゴンドラの唄」（吉井勇作詞、中山晋平作曲）という歌が使われています。ご存知の方も多いと思いますが、一応歌詞をお知らせしておきます。一番と四番が使われています。

壱．命短し　恋せよ乙女
　　紅き唇　褪せぬ間に
　　赤き血潮の　冷えぬ間に
　　明日の月日の　無ひものを
　　⋮
四．命短し　恋せよ乙女
　　黒髪の色　褪せぬ間に
　　心の炎　消えぬ間に
　　今日は再び　来ぬものを

「ゴンドラの唄」1915年（大正4年）に発表された歌謡曲。吉井勇作詞、中山晋平作曲。芸術座（島村抱月ら結成）第5回公演『その前夜』の劇中歌として生まれ、松井須磨子らが歌唱、大正時代の日本で流行した。中山によれば、母の死の直後、悲しみに暮れる帰りの汽車の中で「『ゴンドラの唄』の歌詞が語りかけて」きて、「汽車の揺れとともに、自然と旋律がわいてきた」のだという。

黒澤監督は、これを渡辺が一時の放蕩で気を紛らせようとして、三文小説家に連れられて行ったダンスホールの猥雑な場面に配置しま

す。もう一度は、渡辺が、静かに息を引き取っていく、雪の夜の児童公園でブランコを揺らす場面に配置します。どちらも渡辺の口を通して歌われるのですが、その歌の響きは、白と黒のような明らかなコントラストを描き出します。児童公園の場面では、まるで聖歌のように聞こえます。

この映画で黒澤監督が主人公の渡辺にキリストの姿を重ねて描く場面があります。三文小説家(文士)〔伊藤雄之介が中々いい。フロックコートを羽織った姿はどことなく太宰治をイメージさせる〕に誘われて一時的な放蕩に乗り出した二人が訪れたバーで、この三文文士が酔っぱらってバーのママにこう言います。「この人は胃ガンという十字架を負ったキリストだ」、「エッケ・ホモ(ecce homo)この人を見よだ。」

主人公は自分が末期癌であることを知ることによって、自分の人生の終りに目覚めます。終末論を個人化したといってもいいかもしれません。彼は人生は「終わらない」という幻想から脱却したのです。そのために、彼に残された時間の生き方が変わったのです。児童公園を作ることに命をかけた彼の人生の最終航路の辿った跡、その航跡は、死んで児童公園として、子どもたちの笑顔として、同僚たちの記憶の中に生き続けるのです。ここでは死が、終わりが、真に生きるための重要な契機として捉え直されます。終わりから「今」を生きる。あるいは終わるものとして、今を生きる、ということなのです。終わりの時を生きる、という事を考えるとき、いつもペトロの手紙一の言葉を忘れないようにしましょう。４章７－１１節。

7万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。

8何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。9 不平を言わずにもてなし合いなさい。10あなたが

たはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。11 語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい。奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるためです。栄光と力とが、世々限りなく神にありますように〔アーメン。〕

与えられた新しい一週間も、主イエスとともに歩んでまいりましょう。祈ります。

2019.5.26 日本基督教団千歳丘教会

13:14 「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら――読者は悟れ――、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。
13:15 屋上にいる者は下に降りてはならない。家にある物を何か取り出そうとして中に入ってはならない。
13:16 畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。
13:17 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。
13:18 このことが冬に起こらないように、祈りなさい。
13:19 それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来るからである。
13:20 主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。
13:21 そのとき、『見よ、ここにメシアがいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。13:22 偽メシアや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。13:23 だから、あなたがたは気をつけていなさい。一切の事を前もって言っておく。」

13·14 Ὅταν δὲ ἴδητε τὸ βδέλυγμα τῆς ἐρημώσεως ἑστηκότα ὅπου οὐ δεῖ, ὁ ἀναγινώσκων νοείτω, τότε οἱ ἐν τῇ Ἰουδαίᾳ φευγέτωσαν εἰς τὰ ὄρη,
13·15 ὁ (δὲ) ἐπὶ τοῦ δώματος μὴ καταβάτω μηδὲ εἰσελθάτω ἆραι τι ἐκ τῆς οἰκίας αὐτοῦ,
13·16 καὶ ὁ εἰς τὸν ἀγρὸν μὴ ἐπιστρεψάτω εἰς τὰ ὀπίσω ἆραι τὸ ἱμάτιον αὐτοῦ.
13·17 οὐαὶ δὲ ταῖς ἐν γαστρὶ ἐχούσαις καὶ ταῖς θηλαζούσαις ἐν ἐκείναις ταῖς ἡμέραις.
13·18 προσεύχεσθε δὲ ἵνα μὴ γένηται χειμῶνος·
13·19 ἔσονται γὰρ αἱ ἡμέραι ἐκεῖναι θλῖψις οἵα οὐ γέγονεν τοιαύτη ἀπ᾽ ἀρχῆς κτίσεως ἣν ἔκτισεν ὁ θεὸς ἕως τοῦ νῦν καὶ οὐ μὴ γένηται.
13·20 καὶ εἰ μὴ ἐκολόβωσεν κύριος τὰς ἡμέρας, οὐκ ἂν ἐσώθη πᾶσα σάρξ· ἀλλὰ διὰ τοὺς ἐκλεκτοὺς οὓς ἐξελέξατο ἐκολόβωσεν τὰς ἡμέρας.
13·21 καὶ τότε ἐάν τις ὑμῖν εἴπῃ, Ἴδε ὧδε ὁ Χριστός, Ἴδε ἐκεῖ, μὴ πιστεύετε·
13·22 ἐγερθήσονται γὰρ ψευδόχριστοι καὶ ψευδοπροφῆται καὶ δώσουσιν σημεῖα καὶ τέρατα πρὸς τὸ ἀποπλανᾶν, εἰ δυνατόν, τοὺς ἐκλεκτούς.
13·23 ὑμεῖς δὲ βλέπετε· προείρηκα ὑμῖν πάντα.